

# さくらやま便り

No.330 号

2022年（令和4年）3月15日



## もうすぐ春です



関東では比較的安定した晴天が続くこの時期は、朝夕の気温差も大きくありません。もともと中国では冬の時季を三寒四温と表現していたようですが、

日本では春先のイメージが強いですね。

さて、先月は冒頭で人事のお知らせをしましたが、今月もはじめに人事のお知らせをします。

今回は、21年間ケアハウスでの業務を担当した田中綾子課長（兼生活相談員）の定年退職と、長年シャローム横浜で生活相談員、その他の役職をして来た遠藤裕之生活相談員の就任のご報告です。後の頁にふたりの挨拶を載せましたので併せてお読み下さい。

田中綾子課長はシャローム横浜と桜山の開設初年度からのメンバーです（因みに現在、オーピングメンバーは法人内に7名おります）。はじめはシャローム横浜で3年間勤務し、その後ケアハウスに異動し、以来21年間に亘ってケアハウス一筋に働いてこられました。

日本の福祉事業は、慢性的な人手不足の問題をはじめとする様々な理由から、同じ職場（部門）で長く働くことは比較的少ないのですが、田中課長のお人柄や持っておられる能力はケアハウスに欠かすことが出来ないものでした。

ケアハウスに異動になってからのことは、皆様をご存じだと思いますが、近年は生活相談員として皆様の日常生活の様々な場面に関わって

頂きました。また課長としては、歴代の施設長を補佐しながら、ケアハウスの運営や経営に関して適切な助言をして頂きました。

さて、ここで気になる4月からの動向については、実は田中課長には非常勤職員として引き続きケアハウスに残ってもらえることになっています。立場や役割は変わりますが、これまでの経験を活かして、若手の育成にも尽力頂きたいと考えております。

次には新しい生活相談員のご紹介です。

田中課長の後任は、現在、シャローム横浜の生活相談員とケアマネジャーをしている遠藤裕之主任です。

遠藤主任は、過去に在宅福祉の専門家として長年勤務した経験がありますので、入所施設である特養においては在宅と施設の両方を客観的に比べて、適切な支援内容を考えてくれる貴重な生活相談員でした。

遠藤主任とは、横浜市ひかりが丘地域ケアプラザで一緒に在宅支援のお仕事をしましたので、多くの思い出があります。今回、人事異動でシャローム桜山の主任、兼生活相談員として頑張ってもらったことになりました。皆様の生活上の悩みや課題と一緒に考えることが出来ると思います。皆様、どうぞよろしくお願い致します。

施設長 村本英邦

自然の産物である大根も時には珍しい形に育って私達を楽しませます。

多忙を癒す

金元知子



相撲



淑やか



ボス



2022.7月 令和4年 June 158

短歌

大畑繁雄

春の野に  
早蕨摘めば  
奥山に  
春告鳥の  
啼くぞ哀しき

人事のお知らせ

○退職 田中 綾子

令和4年3月31日付

令和4年4月1日より非常勤として継続

○入職 遠藤 裕之

令和4年4月1日付

役職 主任

職種 生活相談員

事務所からのS「連絡

さくらやま便りのサイズを縮小します

次号から「さくらやま便り」のサイズを変更します。それに伴い、入居者様からの投稿欄がなくなります。これまでご投稿頂いた皆様には深く感謝申し上げます。

洗濯機・乾燥機に関するお願い

洗濯機及び乾燥機をご使用された後は、次に使用される方のために、洗濯槽内の「ごみ取りネット」と乾燥機内の「フィルター」の清掃をお願いします。

3月23日(水) 避難訓練があります

今回は、日中に地震が発生し、その後には火災が起こることを想定して訓練を行います。

【訓練内容】

① 時 間 13...30時(10分前に開始)

のアナウンスが流れます)

② 地震発生(皆様は各居室に待機下さい)

③ 出 火(避難を開始して下さい)

④ 避難場所

1階入居者 1階正面玄関から外に避難して下さい。

2階入居者 レストランからシャローム横

浜の中庭に避難して下さい。

3階入居者 各居室のベランダに出てその場で待機して下さい。

※ 当日、体調の優れない方は、無理をなさらずご欠席下さい。

入館制限について

蔓延防止等重点措置の延長に伴い「入館制限」を3月21日まで延長します。

### 3月生まれの皆様

8日 宮澤 武久 様  
16日 松本 光子 様  
21日 中西 雪子 様  
28日 堀江 花子 様  
29日 高澤 美智子 様

おめでとうございます。  
お健やかな毎日をお祈り致します。

そのためか、あのメモを記した人も読んだかもしれない「おまけの人生」観には、少なからず違和感があるのだ。そもそも、「おまけ」は「お負け」である。値段交渉で、売り手が「負けて」おいて、先で儲けさせてもらおうという算段である。

石蔵教授は「今は、おまけのおまけ人生を歩んでいると思えば、がんを患っていても少しは気が楽になるでしょう。そして、イライラせずに落ち着くことで、心拍数は少なくなり、思いのほか長生きできるかもしれません」と言う。メモの主もまた、父親に対する思いやりから同じように書いたのだろう。

たしかに「おまけ」には、あっても無くてもいいものもあれば、付加価値を与えるものもある。あのグリコでは、付属のおもちやのことを「おまけ」とは言わない。「お菓子を食べる」のも「おもちゃで遊ぶ」のも子供にとっては、どちらも重要であるという考えからである。余命においても、責任の範囲等は変わることはあっても、人生そのものの重要さに違いが生じるわけではない。

走り書きのメモから始めた思索は、どうやらその「時」まで続きそうだ。



シャローム桜山 課長  
生活相談員  
田中綾子

が見学に来られました。施設を案内しながらお話を伺っていると、数年前にご主人を亡くされたとのことでした。

ところが、面倒を見てくれるはずであったひとり息子も、前年に病気で急逝し、先のことを考えて住まいを探しておられたのでした。ご主人を亡くされた時は、いずれどちらかが、と自分に言い聞かせたものの、息子のことは全く想像していなかったことで、深い悲しみとその先の不安を吐露されました。その時は満室で入居はできませんでしたが、翌年に入居され数年ケアハウスで過ごされました。

ひとりの人が、人生の後半の時を過ごす住まいを探しておられる。そのような重大な判断に関わる責任と安堵の繰り返し21年でした。

シャローム桜山で働いて、人生の先輩である入居者の皆様との関わりの中で、幸せとは、生きるとは、老いとは、病とはなど、多

くを教えていただきました。貴重な宝物となりました。

今月で定年を迎えます。4月からは非常勤職員として勤務致します。在任中は、寛容な気持ちでお支え下さり誠にありがとうございました。皆様に関心より感謝致します。



シャローム横浜 主任  
生活相談員  
遠藤裕之

みなさまこんにちは。はじめまして。4月より、ケアハウス・シャローム桜山にて勤務させていただきますこととなりました。遠藤裕之(えんどうひろゆき)と申します。

私は子供のころ、東京や東北地方で過ごしました。そのためでしょうか「美味しい空気・美味しい水・美味しいお米」がいまだに大好きです。

3月までは、お隣の特別養護老人ホーム・シャローム横浜の生活相談員兼ケアマネジャーとして勤務してまいりました。ケアハウスでの勤務は初めてとなりますが、村本施設長はじめ諸先輩職員を見習い、シャローム桜山チームの一員になれるよう務めて参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

## 余生はおまけ

板東洋三郎

うかつにもその時が来るまで、定年後の生き方など考えたこともなかった。誕生月の初日、人事部から退職のための書類を提出するように告げられた。頭の隅にはあったものの、現実になると心穏やかではない。

退職後、しばらくは気楽に構えていたが、そのうち何とも落ち着かなくなった。車は処分していたので、バスか自転車を通える範囲で仕事を探し始めた。応募先の会社の数が増えていくにつれて、彼らの対応に共通点があることに気づいた。

面接の担当者は、皆申し合わせたように私の顔と履歴書を2、3度交互に見て「わかりました。後日ご連絡します」と言って終わるのである。そして、もう一つの共通点は、面接した13社のどこからも「ご連絡」は来なかったことである。年の瀬も迫っていたので、時期外れの就活は一時休戦とした。

正月が過ぎ、仕事に戻った妻が、勤務先の特養の事務長からの伝言を持ち帰った。デイサービスの男性職員が急に退職し、困っている。短期間でもいいので私に来てもらえないかと言う。たぶん、私が仕事を探していると、妻が話したのだろう。

それから3日後、私はそのデイサービスでパート職員として働き始めた。施設には、いくつ

もの部門があり、現在はケアハウスで働き、特養でも食事の介助をしている。

認知症棟の、食器や食品が置いてあるパントリーで仕事をしていた時のこと。ある菓子袋に貼ったメモに目が留まった。「父は今、おまけの人生です。父の好きなものを食べさせてください」とある。

私の知る限り父親の和夫さんは、ほとんど話をしない。唯一彼が声を出すのは「トイレお願いします」と、全ホールに響き渡るような大声で言う時である。

私がこのメモに注目したのは、数日前に、大阪大学教授で医師でもある石蔵文信さんの「おまけのおまけの人生」という記事を読んでいたからである。石蔵さんにとって還暦以降は「おまけ」だ。現在65歳なので5年のおまけ。さらに64歳で見つかったがんによる平均的な余命は3〜5年なので、65歳以降は「おまけのおまけ」だと言う。

実は、私には今ある命に特別な思いがある。施設で働き始めて2年目の7月のこと。友人宅から自転車で帰宅するために、信号のない国道の丁字路にきた。その時、手前の下り線の車列は渋滞で完全に止まっていた。向こう側へ渡りたかった私は、上り車線に車が来ていないことを確認した。ところが、踏み出したその瞬間、左から走ってきたワンボックスカーに衝突されたのだ。

隣区の救急病院に搬送された私の診断は、「外傷性くも膜下出血」と「同時多発性肋骨骨折（6本）」であった。駆け付けた妻に医師は、覚悟をしておくように伝えた。だが、1か月ほどの入院と、2か月のリハビリで仕事に復帰した。

それから一年半後、その冬の最低気温を記録した一月下旬のことだった。未明の4時過ぎに激しい発作を起こし、近くの総合病院に搬送された。心臓の専門医である当直の医師は、「急性心筋梗塞」と診断した。この時も医師は、最善を尽くすけれども覚悟をしておくようにと妻に告げた。

一命はとりとめたものの不整脈が続き、集中治療室に5日も留まることになったが、その後3週間余りで退院した。今回も、2か月ほどの養生で復職できた。職場では「人騒がせな人」という、いささか不名誉な呼称が付く始末ながらも、皆、復職を喜んでくれた。日々の仕事を通じて関わるのは、職員も含めて20代から100代の人々である。この環境で得たものは、私にとってとても貴重である。

定年後の10年余りを振り返るとき、私の救命のために関わってくれた人々への感謝をいつも新たにしている。彼らのおかげで延長された余命が、単なる「おまけ」以上に私の人生を豊かにしてくれた実感があるからである。